

こやなぎ名人のリラックスカフェ 『一休の遺言』

とんち話で有名な一休は、幼名は千菊丸。南北朝を統一した後小松天皇のご落胤として生まれた。しかし当時は、南北朝分裂のしこりが残っている時代。天皇の血をひくものとして監視され、万が一、天皇の地位をねらうというような疑いをもたれば、どういう災難が身に降りかかるか分からない。そこで政治に関わらないことを示すため、6歳の時に安国寺に預けられて、仏門を歩むという運命をたどったものだ。

寺では数々の經典を読破するなど、めきめき才覚を見せるようになる。その噂を聞いた前将軍・足利義満に招かれたときも、無理難題を吹かけられても、みごと知恵を働かせて切り抜け、義満らを驚かせた。当時のエピソードが、「とんちの一休」として現代まで語り継がれているものである。

(ただし子供時代の呼び名は一休ではなく、周建と呼ばれていた。だからアニメや絵本はほんとうなら『周建さん』とするのが正しい)

安国寺で学べるだけのことを学んだ後は、全国を巡る。やがて庶民の間で人気が高まっていく。それまでの仏教の戒律にしばられない自由な生き方、考え方が、共感呼んだものである。

そして80歳の時、応仁の乱で焼失した大徳寺の復興に取り組んだ。一休の知名度と人気は庶民からの寄進を集め、みごと再興を果たし、後に住職となる。ちなみに若いころ修業して、悟りを開き、一休という名を与えられたのがこの寺だった。

文明13年(1481)の11月21日、一休は亡くなる寸前の臨終のとき、遺言状を託した。「この遺言状は、将来この寺に大きな問題が生じたときに、開けよ」と言い残して息を引き取った。享年88歳。

それから百年後。内容は現在に伝わっていないが、大徳寺に、寺の存亡にかかわる大問題が発生した。寺の人々は、どうしたらいいかと頭を抱えた。そのとき、百年前の一休禅師の遺言を思い出した。知恵者の一休の遺言だから、難局をみごとに乗り切る秘策が、きっと書かれているはずだ。

そこでわらにもすがる思いで、遺言状を開いてみた。すると、そこには次のように書かれていた。「しんばいするな だいじょうぶだ なんとかなる」

それを読んだ寺の人々は一瞬ぼかんとしたが、次の瞬間、急に気持ちが楽になった。そうだ、きっとなんとかなるはずだ、と。そして、どうにもならないと思われていた大問題を、みごとに解決した、と伝えられている。

借金、病気、けが、被災など、どうにもならないと思う局面に立たされたとき。そんなときは、一休の遺言を思いだしてみしてほしい。

しんばいするな だいじょうぶだ なんとかなる

小柳剛照 氏(こやなぎ名人) 福島市在住

(経歴)

- ・東北大学卒業後福島県職員となる。
- ・店づくり、まちづくりに取組みたくて、県職員を退職。
- ・東北ジャイロ流通研究所設立。

(現在)

- ・東北ジャイロ流通研究所 所長
- ・地域興しマイスター(福島県知事委嘱)
- ・中心市街地商業活性化アドバイザー
- ・新規・成長分野企業等支援アドバイザー等

(講演歴)

約1,200回。自治体、商業団体、農業団体などの依頼で北海道から九州まで訪問。
個店の経営ヒント、商店街活性化、まちづくり、特産品開発等、テーマは多岐にわたる。



「こやなぎ名人の元気配信館」(<http://www.geocities.jp/koyanagimeijin/>)